

研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2005～2008
課題番号：17320074
研究課題名（和文） 言語類型論と日英語：音韻、統語、意味、談話における類型論の総合的研究
研究課題名（英文） Language typology and Japanese and English: Integrated study of language typology in phonology, syntax, semantics and discourse.
研究代表者 松本 曜 (MATSUMOTO YO) 神戸大学・大学院人文学研究科・教授 研究者番号：40245303

研究成果の概要：

日本語と英語は、しばしば対照的な性質を持った言語であるように考えられがちである。しかしながら、言語類型論という言語のタイプ分けの観点から、その音、文法、意味などを研究すると、日英語間にはかなりはっきりした差異が観察される場合もあれば、深い点で共通性が見られる場合もある。また、言語の中には様々な傾向が混在している場合があり、日本語の中に特定の場合に英語と共通する面が見られたり、英語の中にも日本語と共通する点が見られたりする。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成17年度	5,300,000	0	5,300,000
平成18年度	3,800,000	0	3,800,000
平成19年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
平成20年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
年度			
総計	16,500,000	2,220,000	18,720,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：類型論、日英語比較、アクセント、普遍文法、移動表現、他動性

1. 研究開始当初の背景

類型という概念は、日英語の比較研究において、また言語研究一般において重要な概念である。それは、言語がいくつかの限られた類型にまとめられるということ自体が、言語の性質を理解する上で重要な現象

であることのほか、英語・日本語などの個別言語の性質が、そのような類型の中に位置づけられることによってより明確に浮き彫りになるからである。

この研究は、このような類型論的な研究を踏まえて、それぞれの分野における日英

語の比較の問題に取り組むものである。

2. 研究の目的

取り組む課題には以下のものがある。まず、**A) 各分野において提案されている類型の妥当性の検討である。**言語の類型化は、現在、様々な分野にわたって、言語の諸側面について試みられている。それぞれの分野で提案されている類型論を精密化し、その中で英語と日本語の性質を考察する。考察を行う分野は a) 音韻論、b) 統語論、c) 意味論、d) 談話（語用論）である。さらに、**B) 類型という現象の性質の解明も考察する。**

3. 研究の方法

この研究は、分野と理論的背景を異にする5人が合同で行うものである。分担は以下の通りである。音韻論：窪菌、形式的統語論：岸本、機能的統語論：パルデシ、意味論：松本、パルデシ、談話（語用論）：西光

この5人は、分野が異なるとともに、最適性理論、生成文法、認知言語学など、理論的背景や研究手法においても異なる面がある。それでいながら、これまでも日英語に関して類型という視点をもって研究を行ってきたという共通点があり、また、異なるアプローチの重要性を互いに認識している。

研究の手法としては、内省、コーパス、実験の三つを多角的に用いて研究を進める。

4. 研究成果

A. 各分野の言語類型論と日英語：概略

まず、課題Aの、各分野における言語類型論と日英語の性質について、以下の点を明らかにすることができた。

a) 音韻論：日本語の音韻構造にどのような非対称性が見られるか、また他の言語（英語、韓国語、ルーマニア語等）の非対称性現象との間にどのような異同が見られるか考察した。その結果、二重母音と考えられている [ai] と [au] の間に有標性の違いが見られ、その違いが諸言語に共通していることが明らかになった。また、日本語の中における類型という立場から、日本語二型アクセント方言（鹿児島方言、甕島方言、長崎方言）のアクセント調査を行い、そこから得られたデータ

をもとに、モーラと音節の類型について考察を行った。その結果、モーラと音節は二者択一的な韻律特徴ではなく、「モーラが音節より有標性が高い」、よって「特定言語においてはモーラは音節を前提にして存在する」という仮説が得られた。これらの成果は、国内学会の講演や、海外で出版された文献の中で発表されている。

b) 形式的統語論：主に統語的な移動（例えば主要部移動）により生成される単位と形態的な要請により生成される要素との違いについて研究を行った。その結果、少なくとも日本語のような膠着言語では、英語などの言語と異なり、形態的な特徴と統語的な移動を結びつけるような必然性がないことを明らかにできた。この他、日本語と英語の文法について、普遍文法理論との兼ね合いの中で多くの論文を、国際学会誌に発表している。

c) 機能的統語論：飲食動詞について、アジアの諸言語における用法（文法的用法を含む）を日本語、英語との比較において行い、その普遍性と個別性を明らかにした。この成果は海外で出版された文献で発表されている。

d) 意味論：意味論に関しては、移動表現の類型論と、その中における日英語の位置について考察した。従来の動詞枠づけ言語対付随要素枠づけ言語という対立から、新たに経路主要部表示型対経路非主要部表示型という対立に捉え直し、さらに、移動のみならず、使役移動、視覚的放射などの異なる経路表現において一つの言語内での類型の分裂現象が見られることを明らかにした（詳しくは以下を参照）。この内容は国際学会での招待講演などで発表されている。その全体像に関してはモノグラフを準備中である。

また、「前」「後」のような空間概念の <以前> <以降> のような時間概念へ拡張における言語間に見られる普遍性と個別性を、マラーティー語、日本語、英語などの対照研究を通じて明らかにした。特に、非直示的な状況では、日本語と英語が同じパターンを示し、マラーティー語が正反対の拡張パターンを示すことが明らかになった。これについても、国際学会で発表されている。

e) 談話：談話の構成と関わるいくつかのトピ

ックを扱ってきた。その一つは、他動性の表現についての考察である。英語、日本語の他、アジアのいくつかの言語の比較研究から、言語表現において他動詞を用いるかどうかには、コンテキストにおける責任とコントロールの認識がどのように行われているかが重要であるという結果が得られている。その成果をまとめたものとして、現在モノグラフを準備中である。

各分野における研究の例：移動表現の類型論

以下では、意味的類型論における移動表現に焦点を当てて、より詳しく成果を紹介する。

今までの移動表現の類型論として有名であったのは、タルミーによる、動詞枠づけ言語対付随要素枠づけ言語という対立である。前者は方向などの経路の特性を動詞によって表現する言語で、日本語はこのタイプに属するとされる。後者は、経路の特性を、動詞に付随する要素（たとえば動詞接辞や不変化詞）によって表現するというものである。

この対立にはいくつかの問題がある。タルミーが「動詞枠づけ言語」という用語を使うとき、動詞とは、主動詞を指して言っている。また、付随要素という用語にも疑問があり、英語において、経路の特性は前置詞によっても表されるが、これは付随要素に含まれない。この二つの問題を解決するためには、対立を、経路が表されるのが、文の主要部か、主要部以外か、という観点で理解するのがよい。

この類型論は主に移動物が主語になる自律移動表現に関して議論されてきた。しかし、移動は移動構文のみで表現されるわけではない。(1)では、使役者が移動を引き起こすことが表されている。このような出来事を使役移動と呼ぶ。

(1) Susan threw a stone into the box.

また、(2)では、抽象的な移動物が動いているように感じられる。その移動物とは、目から出る視線である。これらの文が表している出来事を視覚的放射と呼ぶ。

(2) Jack looked into the drawer.

タルミーの類型論は、使役移動や視覚的放射のケースにも当てはまるはずである。実際、英語では、(1)(2)に示したように、移動の場

合と同じように、不変化詞や前置詞で経路の特性が示されており、基本的に移動の場合と同じ表現パターンが取られている。

ところが、すべての言語で、使役移動、視覚的放射の表現が、移動と同じ表現パターンで表されるわけではない。今回の移動事象に関する言語類型のプロジェクトでは、移動の言語表現において主要部表示型の表現を好む言語においても、使役移動では非主要部表示型を多用するケースが多いこと、さらには視覚的放射の場合はほぼ完全に非主要部表示型へ移行するケースがあることが明らかになっている。一方、非主要部表示型を基本とする言語では、どのような場合にも一貫して非主要部表示型を選ぶ傾向がある。英語はこのパターンである。

日本語は、自律移動、使役移動、視覚的放射で、主要部表示型から非主要部表示型へと移行するタイプとして位置づけられる。まずは使役移動では、英語で(1)のように表される出来事は、日本語では(3)のように言い表される。

(3) 石を箱の中に投げ込んだ。

(3)では、経路が「一の中に」という、主要部以外の要素によっても表されているが、複合動詞の後項の「込む」も経路の特性を表している。

しかし、使役移動のすべての場合に、経路の特性が複合動詞後項で表されるとは限らない。たとえば、線的な領域を横切るように物体を移動させる場合である。移動の場合なら、そのような経路上の移動を「渡る」という動詞で表すことができ、この動詞を主要部に用いて(4)のように表現することができる。

(4) 道路を走って渡った。

ところが、使役によってそのような移動を引き起こすことを表す場合は、適当な使役移動動詞が見つからない。(5)のようにしか表現できないのである。これは、経路を非主要部で表す、英語型の文である。

(5) 道路の向こう側に石を投げた。

視覚的放射の表現においては、さらにそれが顕著である。先の(2)で表したような出来事は、日本語では(6)のような文によって表現される。

(6) 引き出しの中を見た。

(6)では、<内側へ>という経路は動詞では表現されておらず、「への中に」という非主要部の要素のみで表されている。これは、英語と似たパターンである。<中を見る>という意味の「*見込む」という動詞は存在しない。

このように、日本語では、自律移動、使役移動、視覚的放射の順で、経路主要部表示型から、非主要部表示型へと移行する傾向が見られる。同じ傾向は、マラーティー語、イタリア語など数多くの言語で見られる。さらに、ここでは詳しく述べる余裕がないが、同じ使役移動においても、使役者が移動物と一緒に移動する随伴移動と、使役者が瞬時に移動物の移動を引き起こす弾道使役移動では、後者の方が非主要部表示型へ移行しやすいことも分かっている。

これは、言語の類型というものが、より複雑なものであり、一つの言語の中でも類型の分裂が起きていることを示している。また、その分裂にも通言語的な傾向があることも示している。

B: 類型の性質について

最後に、B)の類型の性質について述べる。各分野での類型について、共通点と差異が明らかになった。形式的統語論で明らかになるような言語間のパラメーターにおいては、二つの言語の差異がはっきりとした対立によって定式化される。その一方、先の移動表現で見たような意味的な類型論においては、一つの言語の中にも複数のパターンが混在しており、類型は傾向の形で議論される。音韻的な類型論においても、一つの言語の中での方言差のような言語内の差が観察される。このように、言語のモジュールごとに、類型のあり方も異なる。

最後に

以上のような研究は、以下の一覧で示すように、多くの国際的な場で発表されている。また、今回の4年の研究期間中、計4回にわたって海外からの研究協力者を交えての研究会を開いた。特に、最終年度には、Kobe Conference on Language Typologyを開いて、成果を発表し合った。今回の研究プロジェクトの主要部を閉める移動動詞と多動性に関

するモノグラフはまだ完成していないが、くろしお出版から刊行の予定である。これらの出版により日本国内でさらに成果を知ってもらえることになる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 20 件)

- ①Matsumoto, Yo. In press. Aspect of the Semantics of Logophoricity: Comparison of Malayalam with Yoruba and Japanese. *Reality Exploration and Discovery: Pattern Interaction in Language and Life*. 269-284. (査読有)
- ②Pardeshi, Prashant. 2009. The semantic evolution of EAT-expressions: Ways and byways. *The Linguistics of Eating and Drinking*. 153-172. (査読有)
- ③秋田喜美・松本曜・小原京子 2009. 「移動事象は日英語話者にどう聞こえどう見えるのか：移動表現の類型論における音象徴語の位置付け」『神戸言語学論叢』6:1-19. (査読無)
- ④松本 曜 2008. 「空間移動の言語表現とその類型」『言語』37-7: 36-43. (査読無)
- ⑤Kubozono, Haruo. 2008. Japanese Accent. *Oxford Handbook of Japanese Linguistics*. 165-191. (査読有)
- ⑥Kishimoto, Hideki. 2008. On verb raising. *Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, 107-140. (査読有)
- ⑦Kishimoto, Hideki. 2008. On the variability of negative scope in Japanese. *Journal of Linguistics* 44: 379-435. (査読有)
- ⑧Kishimoto, Hideki. 2008. Ditransitive idioms and argument structure. *Journal of East Asian Linguistics* 17:141-179. (査読有)
- ⑨Kishimoto, Hideki. 2008. Some lexically-derived differences in NPI

- licensing. 『レキシコンフォーラム』 4: 223-238. (査読有)
- ⑩ Pardeshi, Prashant 2008. No smoke without fire: Invisible agent construction in South Asian languages. *Annual Review of South Asian Languages and Linguistics 2008*. 63-82. (査読有)
- ⑪ パルデシ・プラシャント 2007. 「他動性」の解剖: 「意図性」と「受影性」を超えて 『他動性の通言語的研究』 東京: くろしお出版. 179-190. (査読有)
- ⑫ 西光義弘. 2006. 「日本語から見た英語の談話構造」 『日本語学』 25・3: 2-19 (査読無)
- ⑬ Kubozono, Haruo. 2006. The phonetic and phonological organization of speech in Japanese. *The Handbook of East Asian Psycholinguistics*. Volume II *Japanese*, 119-200. (査読有)
- ⑭ 窪藪晴夫. 2006. 「日本語のリズムと時間制御」 『韻律と音声言語情報処理』 34-43. (査読無)
- ⑮ Kishimoto, Hideki. 2006. Japanese syntactic nominalization and VP-internal syntax. *Lingua* 116: 771-810. (査読有)
- ⑯ Kishimoto, Hideki. 2006. On the existence of null complementizers in syntax. *Linguistic Inquiry* 32, 2: 339-345. (査読有)
- ⑰ Prashant Pardeshi, et al. 2006. Toward a geotypology of EAT-expressions in languages of Asia: Visualizing areal patterns through WALS. 『言語研究』. 130: 89-108 (査読有)
- ⑱ Horie, Kaoru, Miya Shimura, Prashant Pardeshi. 2006. Overt anaphoric expressions, empathy, and the uchi-soto distinction: A contrastive perspective. *Emotive Communication in Japanese*. 172-190. (査読有)
- ⑲ 窪藪晴夫 2005. 日本語音韻論に見られる非対称性 『音声研究』 9: 5-19. (査読有)
- ⑳ Kubozono, Haruo. 2005. [ai]-[au] asymmetry in English and Japanese. *English Linguistics* 22-1, 1-22. (査読有)
- [学会発表] (計 12 件)
- ① Matsumoto, Yo. Motion typology revisited: Expressions of path in caused motion and abstract emanation. Kobe Conference on Language Typology 2009 年 10 月 25 日 神戸大学
- ② Nishimitsu, Yoshihiro. On the role played by the notions of intentionality and responsibility in transitive sentences. Kobe Conference on Language Typology. 2008 年 10 月 25 日 神戸大学
- ③ Yoshinari, Yuko, Prashant Pardeshi, and Sung-Yeo Chung. On the correlation between the perception of “responsibility” and the use of transitive verb in the encoding of non-intentional events in Japanese and Korean: A socio-psychological study. The 3rd conference on “Language, Culture and Mind”, 2008 年 7 月 15 日、University of Southern Denmark, Odense, Denmark
- ④ Kishimoto, Hideki. “Subject raising in Japanese.” The 5th Workshop on Altaic Formal Linguistics 2008 年 5 月 24 日 University of London.
- ⑤ Kubozono, Haruo. Phonetics-phonology interaction in loanword prosody: evidence from East-Asian languages. 5th Old World Conference in Phonology. 2008 年 1 月 25 日 Univ. of Toulouse.
- ⑥ 西光義弘. Pragmatics in a Wider Perspective. 日本語用論学会第 10 回大会 シンポジウム 2007 年 12 月 8 日 関西外国語大学
- ⑦ Pardeshi, Prashant and Kazuko Shinohara. A Time to Make Sense of Markedness in the Space-to-time Mappings. 2nd Conference of UK Cognitive Linguistics Association. 2007 年 8 月 28 日、Cardiff University, UK.
- ⑧ Matsumoto, Yo. Subclassifying Resultative Constructions: A closer look. 10th International Cognitive

Linguistics Conference, 2007 年 7 月 18 日 Jagiellonian University of Krakow, Poland

⑨ Kazuko Shinohara and Prashant Pardeshi. 2007. The Motion of Time: A Glimpse from an Asian Window. 10th Interational Cognitive Linguistics Conference, 2007 年 7 月 16 日 Jagiellonian University of Krakow, Poland.

⑩ Matsumoto, Yo. Typological split in linguistic expressions for motion events: Motion, caused motion, and fictive caused motion. The 3rd Seoul International Conference on Discourse and Cognitive Linguistics (基調講演) 2007 年 7 月 7 日、Korea University

⑪ Matsumoto, Yo. Constraints on the co-occurrence of spatial and nonspatial paths in English: A closer look at the Unique Path Constraint. 4th International Construction Grammar Conference. (基調講演) 2006 年 9 月 2 日、東京大学

⑫ 窪 蘭 晴 夫 Accent and the Lexicon in Japanese. 言語科学会第 8 回年次国際大会 基調講演. 国際基督教大学. 2006 年 6 月 10 日.

[図書] (計 1 件)

① 窪 蘭 晴 夫 2008. Asymmetries in Phonology 東京: くろしお出版 (195 ページ)

[その他]

移動表現の類型に関する文献目録

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~yomatsum/resources/motionbiblio.html>

Kobe Conference on Language Typology

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/linguistics/kobeconf.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松本 曜 (MATSUMOTO YO)

神戸大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号: 40245303

(2) 研究分担者

西光 義弘 (NISHIMITSU YOSHIHIRO)

神戸大学・人文学研究科・教授
研究者番号: 10031361

窪 蘭 晴 夫 (KUBOZONO HARUO)

神戸大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号: 80153328

岸本 秀樹 (KISHIMOTO HIDEKI)

神戸大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号: 10234220

パルデン・プラシャント (PARDESHI PRASHANT)

神戸大学・大学院人文学研究科・講師
研究者番号: 00374984

(3) 連携研究者

Junko Ito

カリフォルニア大学・言語学科・教授

John Whitman

コーネル大学・言語学科・教授

Dan Slobin

カリフォルニア大学・心理学科・教授

柴谷方良

ライス大学・言語学科・教授

江口清子

大阪大学・外国語学部・非常勤講師

當野能之

関西看護医療大学・非常勤講師